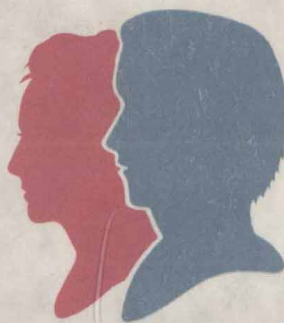


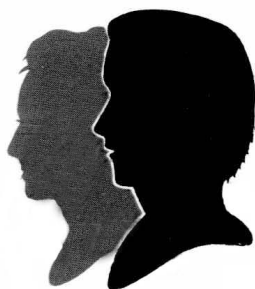
源氏鶏太
二十歳の設計



集英社

源氏鶏太

二十歳の設計



集英社

二十歳の設計

一九七七年一月十五日 改訂一刷発行
一九七八年一月二十五日 改訂四刷発行

定 価 六八〇円

著 者 源氏鶏太

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二丁目一五—一〇

郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六
販売部 (〇三) 二三〇一六七六

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目

次

兄と妹

重役の息子

偽せ紳士

一片の良心

バラとコスモス

雄弁家

悲劇の行列

誕生日

セ

六

四

九

二

三

三

五

失恋仲間

一七三

悪の魅力

一九三

三面鏡

二四

二人だけで

二四

夜の銀座

二五

ブローチ

二五

ふたたび

二六

装丁 後藤市三

二十歳の設計

兄と妹



春は、すぐそこまで、来ていた。そして、幸福も……。

その夜、栗村杏子は、しきりにそういうことを思っていた。五体に押し寄せてくる実感なのだ。その実感に杏子は、わッと声を出したいような氣持になっていた。

やがて、二十歳の誕生日がくる。それが過ぎると、結婚することになっていた。

（あたしは、こんなに幸福であっていいのかしら？）

そういう恐れをすら感じるくらいであった。事実、一年前の杏子は、決して幸せではなかった。寧ろ、不幸といった方が当たっていたかも知からない。

すべては、兄のお蔭なのである。そして、もう一人、津沢敏浩のことを忘れてはならない。忘れるどころではなかった。現に、その津沢敏浩が杏子の横にいるのである。杏子の婚約者として。

二人とも、杏子にとって恩人なのだが、しかし、近頃の杏子は、兄といっしょにいるときには、いつも津沢を思い出しているが、津沢といっしょにいるときには、だいたい兄のことを忘れていた。

（現金過ぎるわ）

自分で、ペロリと舌を出したくなることもある。しかし、兄は、却ってその方を喜んでくれるだろう。そういう兄なのだ。

午後八時を過ぎようとしていた。二人は、明治神宮の外苑から代々木駅の方へ歩いていた。車道に

はヘッド・ライトを光らせた自動車がひっきりなしに走っているけれども、人道には人影がまばらであつた。誰にも邪魔をされないで、恋を語り、結婚後の生活について語るにふさわしい雰囲気であつたろう。

津沢が歩みをとめて、周囲を見まわしている。杏子も歩みをとめて、背の高い津沢の顔を見上げた。しかし、聞かなくても男にしては端麗に過ぎる津沢が、何を思っているか、杏子にわかつていた。

(接吻……)

杏子は、あかくなっていた。

(こんなところで……)

しかし、杏子も亦、津沢の接吻をさっきから、心秘そかに求めていたのである。いわなかっただけであり、積極的にそういう素振りを現わさなかっただけである。

津沢の腕が、杏子の肩を抱いた。杏子は、何んの抵抗も示さないで、うっとり両眼を閉じた。

杏子は、中肉中背の娘であつた。兄と二人で、貧しく暮しているが、すこしの卑しさもなかった。

どちらかといえば円顔であつたろう。腫に特徴があつて、それが杏子を、いっそう美しい娘にしていた。しかし、まだ二十歳の誕生日を迎えていないのだし、九〇パーセントは、完全に大人になっているとしても、残りの一〇パーセントには、どこか熟し切らないものが残っているようであつた。だが、そのために杏子は、却つて新鮮な娘に見えたり、可憐でもあつた。

接吻は、二度、繰返された。どれほどの時間がかかったか、杏子は、知らなかった。ただ、接吻の陶酔の中で、背後を、何台もの自動車が通り過ぎたような気がしていた。遠い感覚の中で、そのことを意識していたようであつた。

「ああ、おいしかった。」

津沢が、満足そうにいった。

「あたしも。」

杏子は、羞じらいながらいった。

「君は。」

「なに？」

「だんだん。」

「だんだん？」

「接吻が、うまくなつて来た。」

「嫌ッ。」

杏子は、叫んでいた。

「いいじゃアないか。」

「そんなこと、今、おっしゃっちゃ嫌。」

いいながら杏子は、なおも何かいいかけようとする津沢の口を封じるために、肩でぶつかっていった。しかし、津沢は、あざやかにそれを避けた。そればかりでなく、杏子の肩を両手で抱き寄せて、もう一度、唇を寄せて来た。

こんども杏子は、何んの抵抗も示さなかった。そして、前に倍した熱烈な接吻となつてしまった。お互のやりとりが、昂奮を誘ったのかもわからない。

杏子は、こんどはもう背後の自動車を意識しなかった。

（あたしは、こんなに幸福なんだわ）

そればかりを、津沢の胸の中で思っていたのだ。

二人は、ふたたび歩きはじめた。

「今夜、何時までに帰ればいいの？」

「何時って、十時頃までなら。」

「十一時でも、大丈夫だよ。」

「どうしてですか？」

「栗村君は、今夜、お客の接待で飲みに行っている。」

そのことなら杏子も、兄からの電話で知っていた。

兄の太郎と津沢は、同じ会社なのである。しかし、津沢の方は、太郎よりも三歳上の二十七歳だし、会社における地位も違っていた。何故なら、太郎は、高校しか出ていない社員だが、津沢の方は、大学を出ていて、しかも重役の息子なのである。今は、二人とも平社員だが数年後には、二人の差はつきりと現われてくるに違いない。そして、津沢は、将来、父親と同じに重役になることは、先ず間違いないとして、高校しかでていない太郎は、せいぜいで、課長であろう。今から課長どまりに終わる運命にあるのだ、といってよかった。

しかし、杏子は、やがてその重役夫人になれるのである。

（あたしの力で、お兄さんを出世させてあげたい）

杏子は、秘そかにそんなことまで考えているのであった。何故ならそれこそ杏子のために大学へ行く希望を、自分から捨てた兄への恩返しにもなるであらうから。

2

杏子の父が亡くなったのは、杏子が、中学二年の年であり、太郎が、高校三年のときであった。母は、その三年前に亡くなっていた。親戚があつたけれども、この二人を引受けようという者は、ひとりもいなかった。葬式が終わると、逃げるように帰って行ってしまう

った。

当時、太郎は、大学の受験準備に熱中していたのである。が、やめた。思い切って、大学へ行くことをあきらめた。そうしないことには、妹を高校も卒業させることが出来ぬ、と知ったからである。すでに友達の大半が就職試験にパスしていた。太郎は、遅まきながら履歴書を書いた。書きながら横で悄然としている杏子に、

「杏子。これから、お兄さんと二人で、やっていこうな。」

と、慰めるようにいった。

「どうやって？」

杏子は、心細そうに答えた。心細かっただけでなしに、淋しくてならなかったのであった。父のいなくなった家の中は、あまりにもガランとしていて、虚しかった。

「どうやってって、兄妹が、どんな場合にも仲良く、ということだ。」

「じゃア、お兄さんは、もう、今までのように、あたしをいじめたりしない？」

「僕が、杏子をいじめたか？」

「そうよ。学校の本を隠したり、用事をいいつけて、肯かないと、ゲンコツをしたりしたでしょう？」

「そうだったなア。」

太郎は、素直に認めた。反省するよりも、そういうことの出来た時代を懐かしんでいるようであった。

「でしう？」

杏子は、ちょっと、威張ったようにいった。

「ごめん、ごめん。」

「あら、あやまらなくてもいいわよ。」

「だけど、あれは、杏子が憎らしいからそうしたのではないんだよ。」

「ほんと？」

「杏子が、可愛くて仕方がなかったからなんだ。」

「ほんと？」

「しかし、これからは、絶対に、あんな真似はしない。あくまで、仲良くしよう。」

「いいわ。」

「杏子。お兄さんは、もう大学へ行くのをよしたよ。」

「お父さんが亡くなったから？」

「そうなんだ。そして、高校を卒業したら会社へ勤めるよ。」

「あたしは？」

「お兄さんが、会社へ勤めたら、お父さんが会社から貰った退職慰労金で、何とか、杏子は、高校まで行けるんだ。だから、しっかり勉強するんだよ。」

「勉強するわ。」

「それから、お父さんが生きていた頃のように、お手伝をおくわけにいかない。何から何まで、二人でやっていかなければならない。」

「ご飯をつくることも？」

「そうだよ。」

「お洗濯や、お掃除も？」

「そうだよ。」

「お兄さんに、出来る？ あたし、まだ、ちょっとしか出来ないわ。」

太郎は、苦笑して、

「そうだろうな。当分は、主として、お兄さんがするから、杏子が手伝ってくれ。洗濯だって、何んだって、だ。だけど杏子は、女なんだからそういうことを早くおぼえなければいけない。そのつもりで一所懸命に手伝って、高校へ入る頃には何んでも一人で出来るようになってほしいのだ。」

「高校へ入る頃には、きっと出来るようになる、と思うわ。」

「頼むよ。」

そのあと、太郎は、しみじみ杏子を眺めて、

「淋しいか。」

杏子は、頷いた。いわれて、今にも泣き出しそうな顔になっていた。

「だろうな。お兄さんだって、本当は、淋しいんだ。泣きたいんだ。だけど、我慢しているんだよ。」

「どうして？」

「だって、お兄さんが泣いたら、杏子だって、泣くだろう？」

「泣くわ。」

「そのかわり、杏子が泣いたら、お兄さんだって、泣きたくなる。だから、お互に我慢しような。」

「あたし、泣かないわ。」

「杏子。」

「なに？」

「これからは、二人っきりなんだ。いいか、本当に、二人っきりなんだぞ。淋しいだけでなしに、悲

しいだけでなしに、いろいろと辛いことや苦しいことが、次次に起こってくるだろう。」

「辛いことも？」

「そう。しかし、杏子には、お兄さんがついている。いいか、心配するな。絶対に心配するな。これだけは、いつておく。お兄さんは、きっと杏子を幸せにしてやる。亡くなる時、お父さんだって、杏子のことを、いちばん心配していたんだぞ。だから、お兄さんは、どんなことがあっても、杏子を幸せにしてやる。」

そういう太郎は、さっき、杏子に泣くなといった癖に、自分の眼のあたりをうっすらと濡らしているようであった。

そのときから、すでに六年を経ているのに、杏子は、いまでもその夜のことを、まるで昨日の出来事のように、ハッキリと覚えていた。

その後、太郎は、今の会社、東亜物産の入社試験にパスすることが出来た。以後、兄と妹が、相寄り、相助け合うような生活がはじまったのである。時にはお互のわがままが出て、いい合いの喧嘩をしたこともあった。しかし、結局は、どちらからともなく、

「ごめんね。」

「いや、僕も、悪かったよ。」

と折れるのだった。

太郎は、杏子を、日本一の妹、と思っていた。

杏子は、太郎を、日本一の兄、と思っていた。

そして、それはお互の幸福を祈り合う心でもあったろうか。

杏子が、津沢を知るようになったのは、就職のことが縁であった。